

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 8 日現在

機関番号：32612

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25770029

研究課題名(和文)キリシタン時代におけるルネサンス人文主義の影響についての実証的・基礎的研究

研究課題名(英文)An Empirical and Fundamental Study on the Influence of Renaissance Humanism in the Kirishitan Era

研究代表者

折井 善果(ORII, Yoshimi)

慶應義塾大学・法学部(日吉)・准教授

研究者番号：80453869

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本イエズス会版の修辞学的伝統としてのルネサンス・ヒューマニズムが、取捨選択などの変容を被りながら後代に継承されている事実を、欧文原典・キリシタン版・キリシタン写本という文献上の流れを追う事によって実証的に明らかにし、近世初期日本と、混沌とした背景を有する当時のキリスト教が接触した際の、宗教的構成要素の取捨選択のあり方を考察した。具体的には、(1)翻訳・翻刻の未だない資料の対訳分析と、(2)戦後半世紀以上包括的調査の途絶えているキリシタン版の海外所在の移動の追跡を行った。

研究成果の概要(英文)：This study traced the historical flow from the original European text to the books printed by the Jesuit mission press in Japan and their written manuscripts by Japanese believers, and analyzed some changes between texts due to some materials being sifted out or added. It showed that Renaissance humanism as a rhetorical tradition of the Jesuit missionaries in Japan has been passed down to later years. I examined the way people chose necessary religious components and discarded others when Christianity came to Japan in the early modern era; the Christian church was in a chaotic situation at the time. Specifically, I (1) translated and analyzed materials that have not been translated or reprinted and (2) traced the overseas movement of the Jesuit mission printings, which has not been comprehensively studied for more than half a century.

研究分野：思想史

 キーワード：イエズス会 東西交渉史 キリスト教史 グローバル・ルネサンス インテレクチュアル・ヒストリー
キリシタン スペイン文学 カトリック

1. 研究開始当初の背景

キリシタン版の研究は、既に多くの研究蓄積が存在するが、近年、コンピューター測量技術を用いた印刷技術史研究、長い間に散逸したキリシタン版の再発見にみられる書誌学的研究、その翻訳原典の特定作業にみられる日欧対訳の文献学的研究など、従来の日本史や国語国文学の枠組みを越え出した研究が相次いでいる。

しかし、そのような発展の反面、テキストの発掘やテキスト自体の分析を何よりも重視するため、それらテキストが成立する際の知的文脈の理解にまで考察が及んでいない。結果として、思想史研究では、「日本人のキリスト教受容」「日本人の西洋科学の受容」というように、「受容」という一方向のみからキリシタン時代が扱われるという現状に未だある。神学・哲学・科学の混交した当時のヨーロッパの、神と自然をめぐる複雑な時代背景を等閑視し、あたかも純粹な「キリスト教」「西洋科学思想」が存在したかのような前提で論じられることも少なくない。すなわち、厳密なテキスト分析に基づきつつも、歴史学における時間軸や、殊に東西交渉史のような距離軸の中にそれらを位置づけるインテレクチュアル・ヒストリーとしては、まだ発展段階にあるといえる。

したがって、このような欠点を補い、欧文原典・キリシタン版・潜伏時代のキリシタン写本というテキストの動的流れの中で、近世初期における東西の知的邂逅の史実を実証的に明らかにすることが、現在必要とされている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本イエズス会版(所謂キリシタン版)の思想的源泉としてのルネサンス・ヒューマニズムが、取捨選択などの変容を被りながらどのように後代に継承されているかを、欧文原典・キリシタン版・キリシタン写本という文献上の流れを追う事によって実証的に明らかにし、近世初期日本と混沌とした背景を有する当時のキリスト教が接触した際の、宗教的構成要素の取捨選択のあり方を考察することにある。具体的には、(1)分析の対象となる、翻訳・翻刻の未だない資料を提示するとともに、(2)戦後半世紀以上包括的調査の途絶えているキリシタン版の海外所在の移動を追跡し、日本の文化遺産の発掘と保存に貢献する。

以上の作業によって、取捨選択の結果として、ひいては潜伏キリシタンにまで継承されたルネサンス・ヒューマニズムの足跡を検証したい。

3. 研究の方法

上記目的達成のための具体的な方法は以下の通りである。

上記「研究の目的」に掲げた(1)に関しては、欧文原典諸版の厳密なテキストクリテ

イクによって欧文原典とキリシタン版との関連を探るのみならず、当時の日本人が書き留めたキリスト教の教理説教ノートと考えられる、キリシタン写本にまで分析を広げることを目指す。これによって、西洋の思想的基底としてのキリスト教と接触した際の、日本側の宗教的構成要素の取捨選択のあり方にまで考察を進める。

上記「研究の目的」の(2)に関しては、『キリシタン文庫』(初版1940年)の著者ヨハネス・ラウレス(1891-1959)の包括的研究以後、戦争や政変の影響で原本の所蔵先が移動していたり、個人蔵として知られていた原本が所蔵者の没後行方不明になっている等の現状を、可能な限りとりまとめる。キリシタン版は日本の重要な文化遺産であるが、海外所蔵先にその認識が必ずしもあるとは限らない。これまでの活動で築いてきた国外のライブラリアンとのコンタクトを十分に活用し、当該資料の重要性を内外に広く公開する。これら資料群の再調査は、所謂インターネット時代になってから初めての試みといえる。

4. 研究成果

上記「研究の目的」に掲げた(1)に関しては、二組の資料群を分析の対象とした。一組目の、写本「吉利支丹抄」(通称)については、その内容の一部がL・グラナダの『祈りと黙想論(抄)』(刊行年不詳、1559年頃とされる)である可能性を示した論が2012年にS・マウゴジャータ氏によって発表されて以来俄かに注目が集まり、写本自体の書誌学的・文献学的分析が後続した。一方その欧文原典については、当時のヨーロッパにおいて多くの版が出版されており、布教地日本において使用された版がその時点で特定されていたわけではなかった。マウゴジャータ氏の上記の結論は動かないと思われるが、欧文原典の版の特定は、日欧両テキスト間の異同が、両文化の交渉に起因する取捨選択ではなく、単に依拠するテキストが異なっているだけであったというような、実証性を欠く結末に至らないための基礎的作業である。この点について明らかにしたのは、『祈りと黙想論(抄)』は1574年に著者による要約の再要約版が、また1587年には他の小作品と合冊された小作品集も出版されているという点である。そしてこの両者を比較すると内容に若干の違いがあり、当該キリシタン写本には、1574年の方にしか存在しないパラグラフが翻訳されているという点も明らかになった。"欧文原典"というものを一つに特定すること自体困難であるという認識は、翻って、当時のヨーロッパ人による翻訳作業の複雑さを証明する結果ともなった。したがって、ヨーロッパにおけるテキスト・クリティークの進展と歩を一にしながら暫定的テキストとして、上記の二つの版を用いて、原典の草稿を整えた。

二組目の「バレット写本」「ドミニカの抜書」(いずれも写本、通称) L・グラナダの『祝日の説教集』『諸聖人の説教集』の対訳研究については問題が残された。それは、1970年代に両者の関係性を指摘した J・L・アルバレスの論考は、検証するに、厳密には「バレット写本」とグラナダ原典との内容の“類似性の指摘”に留まり、その他の欧文ソースも参考にされた可能性が否定できない点が明らかになったからである。したがって「バレット写本」の成立過程を改めて調査すべく、日本イエズス会が参照可能であった、トリエント公会議以降のミサ典礼書を中心に、グラナダに限らないテキストに広く当たっていくことが今後の課題として残された。

上記「研究の目的」に掲げた(2)に関しては、『キリシタン文庫』の著者 J・ラウレスの没後調査・報告・複製の類が存在しない、国外の所蔵館にポイントを絞って調査を進めたところ、キリシタン版原本の所蔵先が移動しており、なおかつ移動先で再び閲覧不能になっている事実をイタリア、スペインにおいて計2件確認した(ここでいう「閲覧不能」とは、本研究責任者が当該所蔵館にて請求後、ライブラリアンと調査したところ、該当資料の存在が確認できなかった、という事態を指す)。キリシタン版は国字本だけでなくローマ字本を含み、なおかつヨーロッパ式の印刷物であるという複雑な分類に属するが、その書誌学的重要性を当該所蔵先の担当者が認識しているとはいえない現状があることを指摘した。

一方、調査の過程で、ドイツ・ニーダーザクセン州のヴォルフエンビュッテルにあるアウグスト公爵図書館(Herzog August Bibliothek, Wolfenbüttel)における、ローマ字キリシタン版『コンテムツスムンヂ』(1596)の存在が明らかになった。本書の現存は英オックスフォード大学ボードレイ図書館、伊ミラノ・アンブロシア図書館につづき世界で3例目となる。この在独刊本については、これまで上述の J・ラウレス『キリシタン文庫』、天理図書館編『きりしたん版の研究』をはじめとするキリシタン版書誌に全く言及されていないことから、インターネットによる書誌情報の重要性と、国際的なネットワークの必要性が当該分野においてあらためて認識された。同館の研究者によってプロベナスや書誌情報等の調査が進められており、今後はこの調査動向を注視しつつ、研究蓄積が豊富な日本のキリシタン文献学研究によってそれを可能な限り補完していきたい。

研究課題申請時に設定した上記(1)(2)以外に、以下の2つの資料群にも若干の考察が及んだ。キリシタン版と、それをもとにした後代との写本との関係を考察するにあたり、キリシタン版『スピリツアル修行』と、その内容が一致することで知られる写本「七科観念書」(通称)との間に存在する内容の差異について、海老沢有道による先行研究を

補強するデータを見出した。また、キリシタン版『日本のカテキズモ』の編纂過程を調査する中で浮上した、A・ヴァリニャーノの「日本史」(写本)を考察し、ヴァリニャーノによる日本人への“理性的な”布教政策の背後に存在する思想的背景(ルネッサンス期の魔術と“古代哲学(prisca sapientia)”)に関するディスコース)を指摘した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

Yoshimi ORII, The Dispersion of Jesuit Books Printed in Japan: Trends in Bibliographical Research and in Intellectual History, *Journal of Jesuit Studies* 2/ 2, Brill, pp.190-208, 2015. DOI: 10.1163/22141332-00202002 査読あり

[学会発表](計4件)

Yoshimi ORII, *From demonstrability to probability: Jesuit arguments on the Soul's Immortality Japan's Christian Century*, The 63rd Annual Meeting of the Renaissance Society of America, Chicago (USA), 2017/03/31

Yoshimi ORII, *Catholic Reformation and Japanese Hidden Christians: Books as Historical Ties*, The 62nd Annual Meeting of the Renaissance Society of America, Boston (USA), 2016/04/02

Yoshimi ORII, *Lost and Found in translation in Jesuit publications: in search of the proselytization policies of the Jesuit Mission in Japan*, The 61st Annual Meeting of the Renaissance Society of America, Berlin (Germany), 2015/03/27

Yoshimi ORII, *Not Caring for Truth But Only for Righteousness: Jesuit Proselytization in Early Modern Japan*, International Conference of Japanese Association of Renaissance Studies, Shinjuku (Tokyo), Gakushuin Women's College, 2014/07/20

[図書](計3件)

折井善果「キリシタン版の研究からわかること 和書と洋書のあいだ」(徳永聡子、高宮利行、林望、折井善果、佐々木孝浩、津田真弓、原田範行『出版文化史の東西 原本を読む楽しみ』慶應義塾大学出版会、2015

年) 95-126 頁。

折井善果「「アニマ」(霊魂)論の日本到着 -キリシタン時代という触媒のなかへ」(ヒロ・ヒライ、小澤実、赤江雄一、桑木野幸司、水野千依、菊地原洋平、平野隆文、加藤喜之、坂本邦暢、柴田和宏、折井善果、平岡隆二『知のミクロコスモス』中央公論新社、2014年) 332-361 頁。

折井善果「対抗宗教改革と潜伏キリシタンをキリシタン版でつなぐ」(豊島正之、岡美穂子、高瀬弘一郎、島津亮二、小秋元段、林進、折井善果、東馬場郁生、白井純、岸本恵実、カルロス・アスンサン、エリザ・アツコ・タシロ・ペレス、川口敦子、原田裕司、高祖敏明、八木壮一、丸山徹『キリシタンと出版』八木書店、2013年) 169-191 頁。

〔その他〕(計5件)

アウトリーチ活動

折井善果「高山右近とその時代 - キリシタン文庫の貴重資料から見る - : キリシタン版について」上智大学公開講座、2017年1月20日(於上智大学)

折井善果「日本キリシタン史を学ぶ: キリシタン版の研究からわかること」清泉女子大学公開講座(ラファエラアカデミア)、2016年1月9日、1月23日、2月6日(於清泉女子大学)

折井善果「世界を彷徨ったキリシタン版の話」白百合女子大学キリスト教文化研究所講演会、2014年11月10日(於白百合女子大学)

折井善果「キリシタン文献における「希望」」第61回上智大学夏期神学講習会、2014年7月28日(於上智大学)

折井善果「キリシタン版は語る: 思想史からみたキリシタン版」『キリシタンと出版』刊行記念講演会、2014年1月19日(於東京堂書店)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

折井 善果 (ORID, Yoshimi)

慶應義塾大学・法学部・准教授

研究者番号: 80453869